

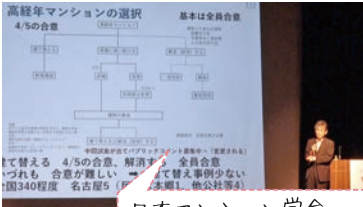


仕事での課題を掘り下げ、
視野を広げる

知の共創プログラム 社会環境学専攻 小林 聡さん Kobayashi Satoshi



知の共創プログラム全体報告会で
同期の受講生と



日本マンション学会
再生シンポジウムで発表



趣味は釣り
石鯛が「ット！」

環境学研究科が2022年度から開始した社会人対象の「知の共創プログラム」。小林さんは仕事をしながら、「社会人博士後期院生」として多忙なか研究を続けている。名古屋大学工学部建築学科を卒業し、大学院に進み、建築という仕事とともに人生を歩んできた小林さん。住宅設計に携わり、阪神淡路大震災で被災して集合住宅やコミュニティに関心を寄せ、介護の経験から福祉や在宅介護の在り方を考え、今は、設計をしながら分譲マンションの管理組合支援に取り組む。そんな小林さんが60歳を機に学び直しを決意。縁あって河村則之准教授(社会学)のゼミへの参加を経て、知の共創プログラムに参加した。

研究テーマは「問題解決型住民組織の形成要因—分譲マンション管理組合に着目して—」。分譲マンションの維持管理は、住民組織の管理組合が担う。修繕や建替え、それ以外にも何か問題が起こったとき積極的に解決を目指す管理組合もあれば、先送りするところもある。その対応が分かれる要因は何か。さらに居住者の高齢化で管理組合の活動そのものが困難になるとき、どんな仕組みがあれば活動を継続できるのか。仕事で感じていた課題を、より広く調査し社会的に分析しようというのが目的だ。「住民同士がどう支え合い、頑張って活動していけるか、その手掛かりがつかめれば、マンションだけでなく町内会や地域づくりにも役立てられる」と小林さん。今は調査と週2回のゼミと仕事に奮闘する毎日だ。

知の共創プログラムは、環境学研究科の多分野の教員の下、学際的なテーマで研究する受講生が集う。「自分の知らない領域の研究について発表を聞き、質問をし、考える。すごくフィールドが広がる」と小林さん。そして年1回、受講生がチームで共通のテーマに取り組む「公開合同シンポジウム」にもやりがいを感じている。研究を越えてつながりが広がる院生生活を楽しんでいる。

知の共創プログラム https://www.env.nagoya-u.ac.jp/co_creation/index.html

編集後記

本号では“フィールド学の地平「てくてくテクトニクス」の取り組みから見る可能性”をエコラボトークのテーマとしました。「てくてく」と歩きながら、地質と建築の意味を持つ「テクトニクス」を観察して、自然と社会の関係を議論する活動が当研究科では行われています。エコラボトークでは、この「てくてくテクトニクス」のこれまでの活動をお聞きするとともに、地質・建築・森林学の観点からフィールド学を議論しました。これらを通して、異なる専門家とフィールドを歩くことにより見えるものが全く違ってくことや、フィールド学における分野連携の重要性を改めて認識させられました。本号では他にもフィールド学に関連する研究を紹介する記事が掲載されています。これらが当研究科の基盤ともいえるフィールド学の目指す方向性の理解にお役に立てば幸いです。(熊谷 博之)

環 KWAN

名古屋大学大学院
環境学研究科

vol.46 2024年3月

【環・46号 広報委員会】

熊谷 博之(環46号編集委員長)
赤渕 芳宏(広報委員長)
山崎 敦子
李 時桓

齋藤 輝幸
伊賀 聖屋
谷川 寛樹

編集／編集企画室 群
デザイン／オフィスYR

名古屋大学

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学大学院環境学研究科
TEL.052-789-3455
www.env.nagoya-u.ac.jp/